

## 私がストラスブールで獲得した3つのもの

文学部地理学専攻 2年 岡田映美

### I 天候に左右されないおおらかさ

ストラスブールに到着した翌日の朝、空は陰鬱とした灰色をしており、木々や建物、看板や川、橋など目に映るあらゆる物の色彩や輪郭がくすんでいた。そして、時折悲鳴のような音を立てる風は、悲しい気持ちを抑えきれずに痲癩を起こしているみたいだった。強い風に揉まれ、細切れになった雨粒がコートの上を伝ったので、持参した折りたたみ傘を開こうとしたが、傘もろとも自分までが風に攫われてしまいそうだったので断念した。ストラスブールに滞在し、痛感したのは天気がすこぶる悪いということだ。ほとんどの日が“Le ciel est gris.”で、晴天の日はほとんどなく、あったとしても一日のうちのほんのわずかな時間だけだった。また、通り雨が多く、折りたたみ傘が手放せなかった。しかし、町を歩いていると気づくが、フランス人はほとんど傘を差していない。コートのフードを目深に被って足早に歩く人ばかりだった。これだけ頻繁に天気が崩れると、いちいち傘を持って出掛けるのも馬鹿らしくなってしまうのかもしれない。フランス人が傘を差さない本当の理由は分からないが、次第に私も少しくらいの雨なら傘を差さなくなった。ある夜、日本語学科の学生と一緒に歩いていた時に雨が降り出したので、3人で友達の赤いストールの端を少しずつ持って、雨をしのぐように身を寄せ合いながら町を駆け抜けた。どんなに身を寄せ合っても3人で1つのストールは小さすぎてみんなびしょ濡れになってしまったけれど、そんなことは気にならず、3人でひとしきり笑った。こんなに楽しい雨の日なんて、長靴を履いて水たまりに飛び込めた小学生以来じゃないだろうかと思った。普段の私は、家の中から雨が降る外を見ただけで、今日はバスがどれだけ遅延するだろうか、いつもの電車に乗れるだろうかとあれこれ考えてしまい、学校に行くのが億劫になる。しかし、ストラスブールでは雨が降ろうが風が吹こうがお構いなしに外へ出て町をたくさん歩いた。悪天候でも平然と町を歩くフランス人を見て少しだけ鷹揚になれた気がする。

### II ストラスブールでの生活で芽生えた食料地理学への関心

以前、私が所属する地理学専攻の教授が「その地域を知る手段としてスーパーマーケットに入るのは面白い」とおっしゃっていた。宿舎近くのスーパーマーケットは迷子になりそうなほど広く、品揃えが豊富だった。日本から持参したパックご飯を使い、オムライスを作ろうと卵を買おうとしたものの、卵1つとってもたくさんの種類があった。塩やケチャップ、肉も同様である。どれを買えばいいものかと悩んでいるうちに一緒に来た友人をうっかり見失いそうになった。教授の言葉通り、見知らぬ土地のスーパーマーケットの中を探検することで私の心は躍った。枕ほどの大きさの袋に入ったスナック菓子や、うさぎの肉を使った缶詰め、ケーキ屋で見かけるような豪華なパティスリーなど、日本のスーパーにはまず並んでいないであろう商品が珍しく、私はこのささやかなフィールドワークを心の底から楽し

んだ。しかも、どれもが日本で売られている値段よりずっと安かった。日本の食品の値段がフランスに比べ高い要因の 1 つは食糧自給率の低さだろう。カロリーベースの食糧自給率では、日本は先進国でも最低水準の 38%だが、フランスは 127%となっている。食品の生産から消費にいたる一連の流れを鎖にたとえたフードチェーンが地理的に拡大すればするほど流通のためのコストはかさむ。日本では当然、フードチェーンが国内で完結することなく、多くのチェーンが様々な国に伸びている。フランスではどのようにフードチェーンを展開し、どのように維持しているのかに興味を持った。

一方で食の安全性について考えると日本は目覚ましい努力をしている。朝食にフレンチトーストを作ろうとして卵を手にとったときに、殻の表面に羽根が付いていることに気づいた。そのとき、「卵かけご飯が食べられるのは日本だけだ」と高校時代の先生がおっしゃっていたことを思い出した。日本で流通している卵はサルモネラ菌等による食中毒予防のため、殻の表面が洗浄・消毒されているのでこのようなことはまず起こらないだろう。私は入念にフレンチトーストに火を通しながら、フランスだけでなく他の国の食の安全性に対する意識や、様々な食品に設けられている衛生基準についても知り、日本と比較したいと思った。このように、2 週間ほど実際に生活し、フランスの食料事情に触れたことで、様々な関心が沸いた。私の所属する地理学専攻には食料地理学を専門の 1 つにしている教授がいらっしゃるので、食料地理学についてもっと深く学び、フランスだけでなく様々な国の食料事情を地理学的アプローチによって明らかにしたいと思った。

### III ストラスブールでできたかけがえのない友人

ある日の授業終わりに日本語学科の学生からパーティーをするので来ませんかと誘われた。ホームパーティーというものがどんなものか経験のない私は興味半分、ノリの悪いつまらないやつだと思われたらどうしようという不安が半分心の中を占めた。日本だったら飲み会やパーティーのような場で飲めない人間や、ノリやテンションについていけない人間は自然と隅に追いやられていく。行ったところで私のような引っ込み思案な人間は全然楽しめないかもしれないと思った。でも、それは杞憂だった。無理矢理飲まされることも、一芸を披露することを強要されることもなく、あまりお酒の強くない私にはジュースを勧めてくれたし、優しい微笑を浮かべ相槌を打ちながらただ私の話を聞いてくれた。そして、「帰りたいときはいつでも言ってください」とか「映美さんの意思を尊重します」と私を安心させるような言葉を何度も言ってくれた。私は人の言葉に熱心に耳を傾け、人の気持ちを慮ることのできる彼らの優しさを見習いたいと思った。彼らの眼差しや言葉から溢れ出る優しさを感じる度に彼らを好きになった。

そして、ストラスブールを発つ日、日本語学科の学生の何人かは朝早くにも関わらず、バスの発着所まで見送りに来てくれた。寒い中ずっと立っていたせいで冷たくなってしまった友人の手を私は何度も握って温めた。言いたいことはたくさんあるのに拙いフランス語しか話せないのが悔しかった。日本だったら恥ずかしくてできないけれど、別れ際に何度も

ハグをしてからバスに乗り込んだ。バスが発進してみんなの姿が遠ざかってどんどん小さくなくても、見えなくなるまで手を振り続けた。ストラスブールに来る前はフランス人とこんなにも仲良くなれるとは思わなかった。言語の壁は分厚く、相手の話していることを理解できなかつたり、自分の思いや考えが正しく伝わらなかつたりするのではないかと思っていた。でも、それは違った。彼らが私の目をじっと見て、私の言葉1つ1つに耳を傾け、それらをしっかりと受け止めてから日本語で一生懸命言葉を紡ごうとする姿を見たとき、大切なのは相手を知ろうという姿勢や相手を知りたいという前向きな気持ちなのだと思う。私は彼らのその姿勢や気持ちに応えられていただろうか。私はもっとフランス語を勉強しなければならないと思った。次に彼らと出会うときには彼らと同じくらい真摯な姿勢で向き合いたい。

一方で、研修のメンバーとの思い出も数え切れないほどある。見知らぬ土地で孤独や不安を一切感じずに充実した日々を過ごせたのは彼らのおかげだと思う。今まで面識のなかった人ともこの研修を通して親交を深められた。研修の間にその人の様々な一面を見つけてはその人について知るほど、ずっと以前から親しかったような気さえもした。例えば E さんは同じ文学部だが、研修前は一度も話したことがなかった。しかし、E さんが物怖じせず店員に話しかけたり、授業でも積極的に発言したりする姿を見たときは、その勇気や知性に憧れた。特に印象に残っているのはトラムに乗る前の出来事である。チケットを購入やチャージをする機械の使い方が分からず困っている現地の老婦人出会ったとき、E さんは代わりに機械を操作しチケットをチャージすると、老婦人に手渡していた。それは非常に勇気がある行動だと私は思った。ちょうどそれはトラムに初めて乗車をするときで、前日にチケットの購入の仕方は先生に教えてもらっていたとはいえ、まだスムーズにできる自信はなかったし、町にいる人に自分から声をかけお手伝いをする勇気は私にはなかった。だから、勇敢で聡明な E さんを私は尊敬している。E さんを含め、2 年生女子全員に私は何度も助けられた。授業では私が聞き取れなかった部分を何度も補ってくれたので劣等生の私はとても救われた。耳をすまし意識を集中させてなんとなく聞き取れても、フランス文学専攻の 2 人の理解力にはとても適わなかった。また私は、プレゼンテーションの発表や家庭訪問など、行動を共にすることが多かった T 君のことも尊敬している。T 君は私と真逆で、気さくで社交的で自分の力で自分の世界を広げることができる人だ。家庭訪問先や日本語学科の学生との交流の際も、フランス語を織り交ぜながら英語を巧みに使い、相手との距離をぐんぐんと縮めていった。一方で、責任感の強さも感じた。T 君はプレゼンテーション発表の練習の際には時に厳しいことも言い、班員に意見を求めていた。発表の質を下げまいと常に自分の考えを言葉にし、行動する意志の強さに憧れた。私はこの研修で友人の持っている自分には無いものに憧れ、自分も少しでも友人の良い部分を取り込みたいと思った。そのように前向きに思えただけでも成長だと感じている。今はこのように友人の勇姿を書き表し 1 つの形にできたことが誇らしい。語学研修に参加して彼らに出会えて良かったと心から思う。

#### IV おわりに

この文章を書いていると、ストラスブールの様々な情景が鮮明によみがえった。時を経て、いずれはそれら全ての場面がぼやけて曖昧になっても私は悲しいとは思わない。雨が降る日には傘を差すかもしれないけれど、くよくよしたりはしない。あの赤いストールを被って友人と町を駆け抜けたことを思い出して思わず頬が緩むかもしれない。そして、自分の専攻である地理学ともしっかり向き合い、勉強し、実習では納得のいく調査を成し遂げる。興味を持った分野についてとことん追究していきたい。また、最も仲良くなった日本語学科の友人が今年の夏、東京にやって来る。名古屋にも来てくれるらしいが、私が東京に飛んでいくことだってできる。会うのが楽しみだというフランス語が分からなくて辞書で調べながら文字を打ち送信したが、再会するときには今よりフランス語を話せるようになって友人を驚かせたい。さらに、研修のメンバーとの親交も続いている。もしも私が怠惰な学校生活を送っているときに彼らとすれ違ったら思わず背筋が伸びてしまうと思う。かっこ悪い姿ではなく、頑張っている姿を見せたい。ストラスブールで獲得したものが私の未来につながりますように。

#### 文献

荒木一視編 2013.『食料地理学の小さな教科書』ナカニシヤ出版.

農林水産省. [http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/zikyu\\_ritu/](http://www.maff.go.jp/j/zyukyu/zikyu_ritu/) (最終閲覧日:2019年3月25日)